一宮市博物館だより

No.25 1999.10.

春野の柵

算蝶の柵

岩波の柵

棟方志功作「空海頌」より

1999年　秋季特別展　佐藤一英生誕百周年記念

河井寛次郎と棟方志功展

平成11年10月9日(土)～11月21日(日)
(ただし10月9日は午後1時から一般公開)

志功と談笑する寛次郎。昭和三十二年(一九五七)

昭和十一年(一九三六)四月二日、棟方志功は、第十一回国画会展の会場となる上野・東京府美術館で、民芸運動を展開する柳宗悦・浜田庄司と運命的な出会いをする。この時の出品作は、佐藤一英の長篇詩を版画化した「瓔珞譜・大和し美し版画巻」(二十柵)であった。この作品は当初あまりの大作のため、一額を除いて他の三額の引き上げを求められていたが、柳・浜田の両氏に認められ、全作品が展示できるようになるとともに、当時建設中の日本民藝館に破格の二百五十円で買い上げられた。同じ頃、柳の民芸運動の同志であった河井寛次郎は、東京・高島屋で「陶硯百種展覧会」開催のため上京中だった。柳は、寛次郎に志功を日本民藝館で紹介し、両者は感涙にむせぶ対面となる。ここで京都の仏像が見たいという志功の願いが語られたようで、後日寛次郎は「クマノコヲツレテカエル」という有名な電報を自宅に打ち、京都の自宅へ志功を同道した。寛次郎は初めて会った時から志功を熊の子と呼んで慈しんでいた。

京都で志功は、寛次郎から教典の講義を受けたり、神社仏閣を見学したりした。志功の京都・寛次郎宅滞在は三十数日に及び、この間、娘ちよゑの病気のために一時帰京する事もあったが、すぐに寛次郎宅へと戻ってきている。この頃の感想を、志功は「河井寛次郎先生　真っ直ぐな事をいえば、先生は泣いて下さいました。こんなことはこの三十年の間に、嘗て巡り逢わなかった境涯でした。…」と記す。

寛次郎によって仏法的テーマに目覚めた志功は、「華厳譜」や「釈迦十大弟子」をはじめとした作品群を次々に発表する。「華厳譜」に対して寛次郎は、「遺憾なことにほんとうのものは大抵はいたましい中から生まれるものだ。…」という感動の文章を残す。第二次大戦後、志功は恩師寛次郎を讃仰した作品「鐘渓頌」二十四柵を制作、その中の四柵を二十一年秋の日展に「鐘渓頌・公案『鯉魚』板画経」と題して出品し、岡田賞を受賞。またこの年一月には、大阪・高島屋での寛次郎「新作陶器展覧会」壁面装飾のため、画仙紙六枚に「釈尊受偈図」(のち「捨身解偈図」「施身聞偈図」とも)の軸六幅を描いたり(答信『カガヤクシゴトミタ」セカイノタカラ」エノカミサマヨ」バンザイ」カワイ』)、二十二年三月、寛次郎の詞『火の願ひ』『いのちの窓』を板画本にする等、交流を深めていく。

本展は、佐藤一英の詩を介して巡りあった寛次郎と志功、それぞれの代表的な作品を展観し、二人の魂の響き合いを探ろうとするものである。寛次郎については、昭和三十二年(一九五七)のミラノ・トリエンナーレ国際工芸展グランプリ受賞作品の姉妹作「白地草花絵扁壺」をはじめ初期から晩年に至る七十八件。志功については、版画家としてその独創的個性を認められるきっかけとなった「大和し美し」をはじめ、仏教的テーマをモチーフにした作品を中心に三十七件で構成している。

出品作品

河井寛次郎
塗分魚手文白食籠、辰砂貼文扁壺など陶器類五七点の他、木彫、陶板、墨書画など全七八件。

棟方志功
「華厳譜」「大和し美し」「鐘渓頌」などの他、寛次郎の言葉を作品にした「遺憾なことにの柵」など三七件。

講演会

講師　宇賀田　達雄氏(財)棟方板画館理事)
演題　「志功と寛次郎・一英―『大和し美し』前後―」
平成十一年十一月七日(日)　午後一時三十分から
妙興寺本坊客殿にて

仙勝さの箱枕

～木曽川漁師の道具箱～

■木曽川の漁と仙勝さ■

一宮市北部を流れる木曽川では、従来アユ・サツキマス・スズキ・ボラ・ウグイ・ウナギ・コイ・フナなど、海からの遡上魚や淡水魚が豊富に獲れる漁場だった。現在博物館に収蔵されているサツキマスの地曳網は、往時を偲ばせるものである。しかし、現在では専業漁師もいなくなり、捕獲対象魚もアユが中心となるなど、多様な本来の川漁のあり方は消えてしまった。

仙勝さこと豊田仙勝氏は、北方村大字北方字東大日に明治八年に生まれた船大工で、小規模な川漁もする人であった。そして、刺網・投網といった一人で操業可能な漁網をはじめ、興味深い道具箱を残してくれた。

■仙勝さの箱枕■

仙勝さが残した箱枕は、夜、船の中で寝泊まりするときに使う箱枕で、その上段・下段の引き出しの中には網を修繕する道具がたくさん保管されていた（表1）。その中には、昭和二十四年から二十六年にかけて捕獲した魚の重さと売値のメモが入っていた（表2）。仙勝さはそのときすでに七十歳半ばを過ぎていたため漁獲量は少ないが、四月末から五月にかけてウグイ・スズキ・サツキマス・ボラを獲っていたことがわかる。また、売値と重量の関係から、もっとも高値で売れる魚がサツキマスで、続いてスズキ・ボラ・ウグイであったことがわかる。因みに昭和二十四年当時、東京都内でラーメン一杯二十四円だったそうである*。

また、箱枕の中に保管されていた道具で最も数が多いのが、網の目の幅を決めるメイタである。最大のもので幅四・九センチ（網両目で三寸二分）、最小のもので幅〇・八ミリ（網両目でおよそ三分）である。次に多いアバリは、最も大きいもので長さ十五・八センチ、幅一・五二センチ、小さいもので長さ八・四センチ、幅〇・五センチである。珍しい道具として網をきよう（修繕する）ときに網の上下をひっかけておく道具や、イワ縄の長さを測ったと思われる道具（図1）がある。前者については、現在は針金を曲げたものを使っている漁師もいる。いずれにしても、仙勝さという一人の漁師が使用していた道具の多さを知らされる資料である。

■川漁の行方■

図2に示したのは一九〇八年から一九一八年までの十一年間の北方村が属した葉栗郡における漁獲高である。大正時代でさえ、徐々にアユの漁獲量が増えコイやハエの漁獲量が減っていることがわかる。次第に日本人の嗜好が変化し、川魚に対する需要は今後さらに減っていくのかもしれない。

（久保禎子）

＊朝日新聞社『値段史年表』一九八八による。

箱枕の中身（詳細:表1を参照）

表2　仙勝さの手帳（昭和24年～26年）

年	月日	種類	量（匁）	値段（円）	年	月日	種類	量（匁）	値段（円）
昭和24	4.23	いぐい	402	294	昭和25	4.21	いぐい	500	200
1949	4.24	いぐい	230	161	1950	4.23	ます2本	450	900
		すゝき	160	240			いぐい	110	44
	4.25		170	119		4.27	ボ　ラ	130	65
	4.26	すゝき	90	135			いぐい	530	212
		ま　す	110	275		4.28	ボ　ラ	280	140
		いぐい	510	357			いぐい	220	88
	4.27		690	483		4.29	ボ　ラ	110	55
	5.5	ボ　ラ	370	370			いぐい	510	204
		いぐい	100	70		4.30	ま　す	190	380
	5.6	いぐい	200	140			ボ　ラ	180	90
	5.8	ます2	340	850			いぐい	300	120
		いぐい	370	259		5.1	いぐい	110	44
	5.11	ボ　ラ		120		5.10	いぐい	130	52
	5.12	ます1本	310	775					✓2511
	5.17	ます1本	230	575					83
		いぐい	130	91	昭和26	5.8	いぐい	300	120
	5.18	ま　す	100	250	1951	5.12	いぐい	170	68
	5.19	いぐい	90	63		5.13	いぐい	510	204
	5.21	いぐい	180	126			ます2本	190	475
	5.22	いぐい	220	154			いぐい	550	220
		すゝき	80	120			ボ　ラ	150	120
	5.23	いぐい	230	161					✓1237
		ボ　ラ		140					
	5.27	いぐい	220	154					
	5.28	いぐい	280	196					
	5.30	ま　す	130	325					

表1　箱枕の中身一覧

上段			下段		
名称	員数	備考	名称	員数	備考
ネコザメの歯模付	1	カギ　4	懐中時計	1	
ルーペ	1		曲尺	1	
鉛筆	3		鉛筆	3	
木曽川漁業組合章	1	木札	手帳	1	
木綿の巻糸	2		絹糸の糸巻	1	
絹撚糸の巻糸	1		ピーピークダの心棒	1	
縫針	4		縫針	7	
メイタ（目板）	15	木/真鍮/鉛など	メイタ（目板）	13	真鍮/竹など
アバリ（網針）	2		アバリ（網針）	18	
用途不明カギ	2	釣針を魚の口からはずす道具?	カギ	1	
カミソリ	1		糸切バサミ	1	
ノコギリ	1		アンバ（桐）	1	
糸ノコギリ刃	1		網をひっかける道具	2	網を編むときに、網の上下をひっかける道具
ニッパ	1		カナイワ（ハヤアミ用）	1	
ドライバー	1		イワ縄の幅をきめる道具（竹木）	10	木/竹
鉛板	1		鉛板（長さ8センチ、幅1.5センチ）	1	
用途不明竹のハケ	1		用途不明穿孔具	1	
釣針（アユカケバリ）	3		釣針（アユカケバリ）	1	
釣針（ナマズ・ウナギ用）	56		釣針（アユカケバリ糸付）	10	
釣針（フナなど）	2		釣針（フナ用）	2	
その他雑	-		その他雑	-	

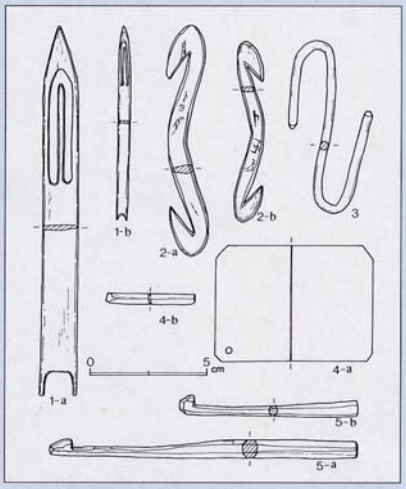


図1　漁網修繕のための道具類
1.アバリ（a:最大,b:最小）、2-a・b.網の上下をかける道具、3.網の上下をかける道具（現在）、4.メイタ（a:最大,b:最小）、5.イワ縄の幅をきめる道具?（a:最大,b:最小）

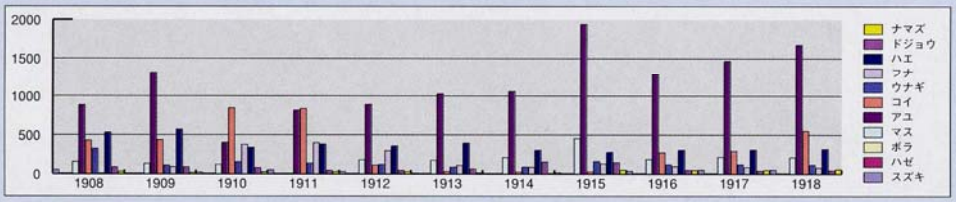


図2　葉栗郡における1908～1918年までの漁獲量（愛知県統計書より）

佐分（さぶり）　眞（まこと）

①赤い屋根の家
制作年　一九二七年（昭和二）頃
技法・材質　油彩・板
寸法　三七・五×四五・〇cm
署名　画面左下に「m.Sabouri」
平成十年度購入

②赤いマフラーの男
制作年　一九三〇年（昭和五）頃
技法・材質　油彩・画布
寸法　六〇・五×五〇・〇cm
署名無し

③姉弟旅姿（田中たまと徳次郎）
制作年　一九三一年（昭和六）
技法・材質　油彩・画布
寸法　九一・〇×七二・五cm
署名・年記　画面左下に「昭和六年夏　真写」

②③は、名古屋市昭和区高峯町　田中英子氏寄贈

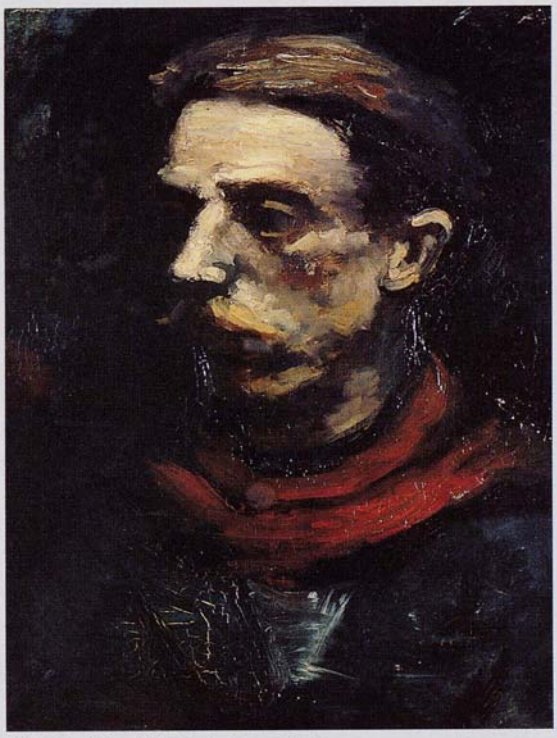
①佐分　眞　「赤い屋根の家」

平成九年秋の一宮市博物館特別展「画家・佐分眞の軌跡」の開催後、佐分眞の作品を収集する機会を得た。ここでは油彩画三点の紹介をする。

佐分眞は、第六代一宮町長を勤めた佐分慎一郎の子として一八九八年（明治三十一）名古屋市に生まれ、東京美術学校（現・東京藝術大学）卒業後、一九二七年から三二年迄フランスに遊学し、三一年の第十二回帝展で特選を受賞。帰国後も連続して特選を受賞して、官展系の新鋭として大いに注目を浴びたが、惜しくも一九三六年（昭和十一）に三十八歳で没した。画家としての実質的な活動は十二年間と短いものであったが、リアリズムに立脚した重厚な画風はいまだにその輝きを失ってはいない。

父・慎一郎（一八五七―一九一五）は、一宮銀行、一宮紡績株式会社の取締役を勤め、一宮瓦斯株式会社、一宮電気株式会社設立に際し取締役となるなど、一宮の経済界で活躍し、その後名古屋に進出して実業界に足跡を残した。一八九八年から一宮町（現・一宮市）の第六代町長を勤めたが、当時、地方自治体の首長は、政治家というよりも経済界の実力者らが持ち回りで勤めていたようである。佐分が十七歳の時に亡くなった父の遺産は莫大なものであったが、佐分自身は家計のことには全く頓着せず、専ら母・たまが管理をしていたという。最初の帝展特選受賞作「貧しきキャフェーの一隅」（一九三〇年作）が三井男爵の買い上げとなり、三十歳を過ぎて初めて稼ぎを得たが、経済的に恵まれた佐分は、それまでアルバイトをすることもなく絵の勉強に専念することができ、二度にわたって外遊まですることができたのである。佐分没後に設けられた佐分賞の資金はその遺産をもとに拠出されていたものである。ちなみに、第四回（一九四〇年）の受賞者に香月泰男、棟方志功、第七回（一九四三年）の受賞者に杉本健吉がいる。

①の絵の具を多く使った重厚なタッチは渡仏後の作風であり、縦横あるいは斜めに交差する筆触はパリ画壇のブラッキスの影響を受けたものともいわれている。「緑陰」（三重


②佐分　眞　「赤いマフラーの男」

③佐分　眞　「姉弟旅姿（田中たまと徳次郎）」

県立美術館所蔵）などの筆致と共通点があり、制作はそれらとごく近い一九二七年頃、渡仏まもなくに落ち着いたパリ近郊ムードンでの作と推定される。小品だがしっかりと描き込まれた秀作である。

②の作品は、暗い背景の中に人物の顔部分だけに上部からスポットがあてられ、マフラーの赤い色が際だって印象深い。そこで、画題は「赤いマフラーの男」とした。署名はないが、その描法から、レンブラントの影響のもと佐分独特の重厚な画風を確立した一九三〇年から三二年頃の作と推定される。

③は、一九三一年、フランスから一時帰国した年に、実母たまと叔父田中徳次郎の二人を描いた作品。徳次郎は中部電力会社の前身となる電力会社を興した実業家で、一九二四年に洋行から帰った。絵画制作に行き詰まっていた眞にフランス行を進めたと伝えられる。この作品は、油彩画としてその出来映えを観るのではなく、あくまでも眞ゆかりの人物を記念に描いた作品ととらえるべきであろう。帰国後に描かれた水彩による風景画などでは「佐分生写」と記し印を押すという、日本画における落款と呼ぶべき形をとっているが、ここでも日本画を意識したものか、「昭和六年夏　真写」と縦書きに署名をしている。そのことは、油彩画でありながら、自分の本業としての作品ではないと主張しているようにも読みとれるのである。署名の変遷と画風の変化との関わりについては今後考察してみたい。

（毛受英彦）

土田麦僊（つちだばくせん）

花と金魚図

制作年　一九二五年（大正十四）頃
材質・形状　絹本着色軸装
寸法　本紙　二八・〇×一三六・〇cm
落款　麦僊（印）
箱書　小野竹喬
平成十年度購入

土田麦僊は、一八八七年（明治二十）に新潟県佐渡郡新穂村の農業土田千代吉の三男として生まれ、金二と命名された。土田家は佐渡でも屈指の名家であったが、当時はさして裕福ではなく、中学進学の望みが叶えられず金沢村（現・金井町）の正覚坊・志和舜雄のもとに預けられる。京都の本山知積院に入るが絵の志を捨てきれずに出奔し、法衣商の紹介で鈴木松年に入門。一時帰郷後の一九〇四年暮、竹内栖鳳（せいほう）に入門し「麦僊」の号を受ける。同輩格には終生の友人となる小野竹喬（ちくきょう）がいた。四条派の伝統的写生に西洋絵画の写実性を融合した栖鳳の画風をいち早く身につけた麦僊は、たちまち頭角を現し、一九〇八年第二回文展に初入選、三等賞を受けた。翌年開校の京都市立絵画専門学校に竹喬とともに入学、村上華岳、榊原紫峰らと出会う。明治末から昭和初期にかけては日本画にとって重要な転換期にあたり、東洋の伝統と西洋の影響との葛藤という大きな問題が課せられていた。そんな中で、麦僊は、東西両美術の融合を求めてゴーガンやルノワールに憧れる一方、桃山の障壁画や江戸初期の風俗画、さらには宋・元の院体花鳥画に学んで個性豊かな作品を発表。しかし、旧弊な文展は彼の創作を認めなかったことから、一九一八年（大正七）に華岳・竹喬・紫峰らと国画創作協会を結成、自由な創作の場に自らの信じる制作を展開した。一九二一年から一年半のヨーロッパ遊学後、改めて自分の道に確信を深めて活躍し、近代日本画の偉才と注目されたが、一九三六年（昭和十一）膵臓癌のため四十九歳で没した。

ヨーロッパ遊学から帰国後、新たな素材を求めていた麦僊は、一九一一年（明治四十四）以来親しくする一宮市の俳人野村勘十郎（号・一志）から大日比野（現・一宮市浅井町）後藤国政方の裏庭に芥子の珍種が蔟生するのを聞き、一九二五年、数日にわたりこれを写生した。翌年以降も浅井町黒岩の脇田家で芥子の写生を行ったことが知られている。（この頃、麦僊ばかりでなくほかの画家たちも一宮の地へ訪れたと伝えられている。）芥子の図はその後国画創作協会展、帝展などに出品、話題を集めた。麦僊としては初出品となる一九二九年第十回帝展出品作の「罌粟」は宮内省に買い上げられた。

本品は、展覧会への出品作とは異なり、一般家庭向けに描かれた小品ではあるが、金魚鉢に生けられた芥子の花（ヒナゲシ）という画題に麦僊の個性を発揮した秀作である。

（毛受英彦）

土田麦僊　「花と金魚図」

◆桃塚古墳測量調査報告◆

平成10年度博物館実習の1カリキュラムとして、桃塚古墳の測量調査を実施したので、以下その成果を報告する。

桃塚古墳は、市内浅井町尾関字同者130番地に所在する円墳で、愛知県指定史跡「浅井古墳群」5基の中の1基である。従前測量調査は実施されていなかった。

浅井古墳群は、木曽川左岸の扇状地域に位置する、かっては50基ほどが遺存した後期古墳群である。墳丘が遺るのは、県指定史跡となっている4基と小塞神社境内に遺る小円墳2基の6基である。

昭和33年から35年にかけて、開発の波にさらされた。その時名古屋大学によって、8基の古墳の発掘調査が実施され、その成果は「新編一宮市史資料編3」に報告されている。

浅井古墳群のうち、現存する毛無塚古墳は直径30mの円墳、小塞神社古墳は全長36mの前方後円墳と推定され、この2基が時期がやや遡るものの、それ以外の古墳は調査されたものを含めて、後期古墳で構成されている。

桃塚古墳は、現況で直径約15m、高さ約1mの規模を有しており、墳丘はかなり削平が進んでいる。

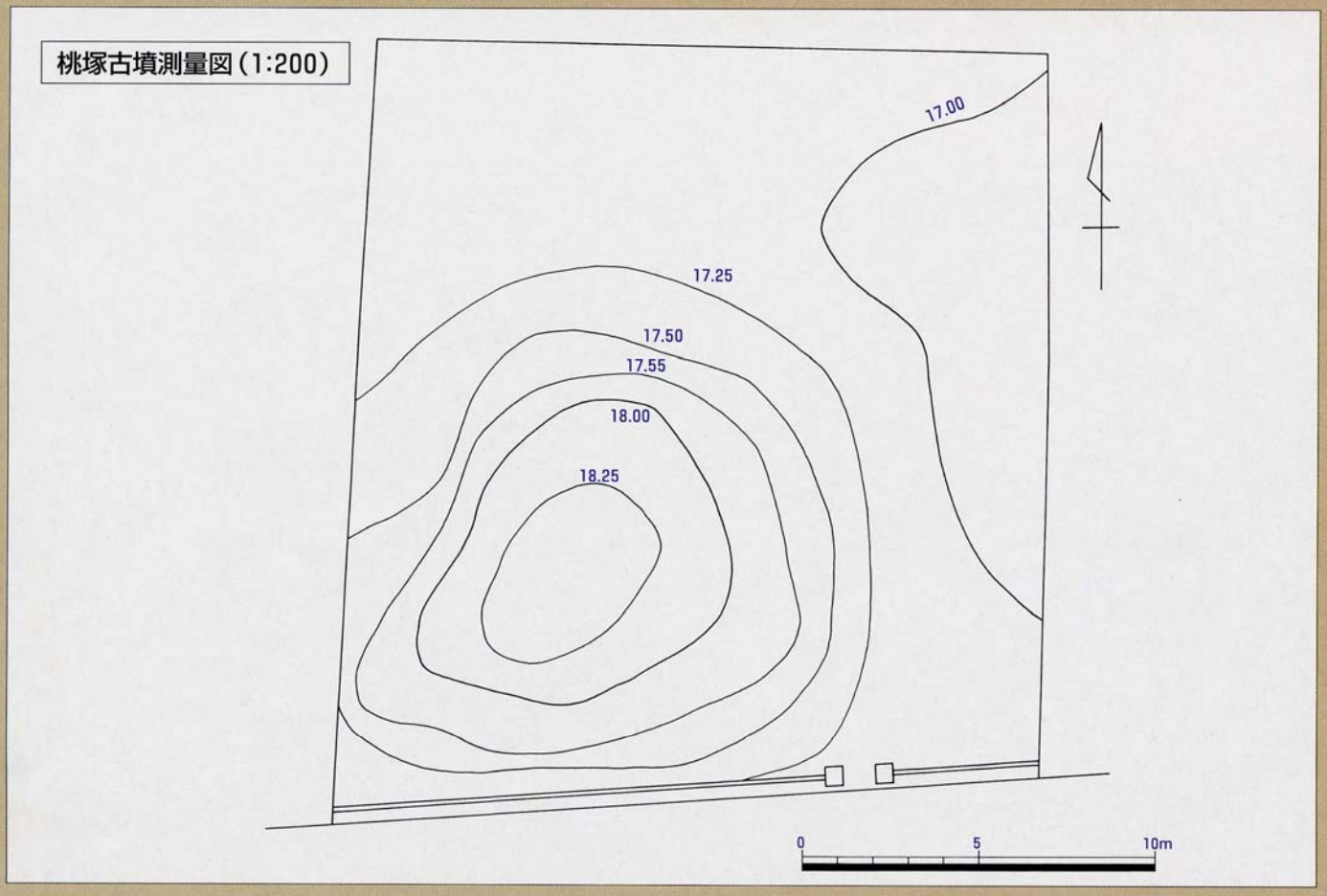
測量調査の結果は、従前の計測値とほぼ変わらない結果を得られた。北側部分の標高17.25mのコンター（等高線）が円を描くとすれば、この古墳は、南側が道路によって削平されていると考えられ、直径は18mと復原されよう。高さは測量調査の結果では、やはり1mしか遺存していない。

遺物の出土はまったく知られておらず、造営時期を決定する決め手はないが、墳丘の大きさから推定して、他の古墳と変わらない時期（7世紀代）と考えられる。また主体部も、浅井古墳群通有の川原石積みの横穴式石室と推定できよう。

測量調査：川島美幸・木村知誉子（実習生）、寺沢なつ江

測量図トレース：岡田真知子

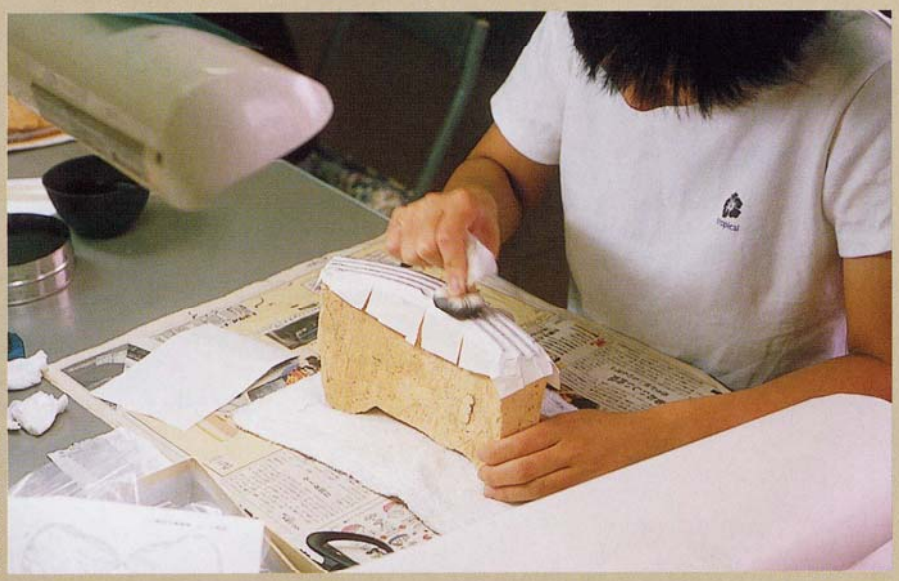
（土本典生）



学芸員実習はじまる

今年も8名の大学生が、学芸員の資格を取得するための実習を受けにやってきました。昨年から実習生を『考古』『民俗』『歴史・美術』の3部門に分け、実習期間も5日から10日に延長して実施しています。

考古部門



出土遺物の拓本採取

考古部門は、昨年と同様、出土遺物の整理に主眼をおいて実施しました。注記・実測・写真撮影・拓本・図版割付・図面トレース・遺物観察表の作成など、報告書作成の過程をたどりました。

（担当／土本典生）

民俗部門

博物館実習民俗部門は、夏季展覧会の開始時期とその時期が重なったため、展覧会の準備・普及・撤収から始まりました。七月十七日、展示ケースのガラス清掃から始まり、実際にパネルを作成したり、展示・撤収するなど、資料に実際に触れることができたと言えます。期間中には、来館者に「展示」を体験してもらうコーナーで、ボランティアの方に助けられながら来館者との会話を体験し、普及活動の現場に立ってもらうこともできました。また、収蔵庫内での整理作業では、寒さに耐えながら搬入番号の注記を手伝ってもらい、女性二人の体力のある実習生で、昨年の実習生に続きさまざまな面で活躍してくれたと言えます。

（担当／久保禎子）

歴史・美術部門

歴史・美術部門では四人が実習を受けています。美術品の取り扱いや、他館への見学といった実習の他に、図書や和本・収蔵庫の整理なども体験してもらいました。今年の収蔵庫内作業は、市役所の廃棄文書の内、博物館が選別・収集している公文書の整理でした。また、秋の特別展でも、一部の飾り付けを手伝ってもらいます。美術工芸・歴史部門の実習内容はこの飾り付けで最終となりますが、展示の実際を体験し、今後に活かしてもらいたいと思います。

（担当／毛受英彦・谷口純一）

•これからの博物館•

展覧会

収蔵品展　**くらしの道具－今と昔－**
1月8日～2月20日

作品展　**手つむぎ・染め・織り展**
3月5日～20日

くらしの道具－今と昔－（昨年の展示より）

講演会

連続講演会　**尾張平野を語る　4**　2月

戦国時代末頃の苅安賀村は、浅井新八による築城以前からすでに町として発達をしていました。『信長公記』に「富貴の所」と表現された富田の地は果して苅安賀のことだったのか。最近の研究成果をもとに戦国期の苅安賀の、中世から近世への移り変わりを探ります。

講　座

博物館講座　**土器を作ろう**

土器をつくる（昨年の講座から）

12月に、小学校高学年児童とその親を対象にして実施します。野焼き用の粘土を使って土器を制作し、屋外で野焼きします。募集の詳細は、広報でお知らせします。

公　演

巡回民俗芸能公演　**島　文　楽**　3月26日

一宮市無形民俗文化財の人形浄瑠璃「島文楽」は、慶応3年（1867）に大毛の人々が岐阜から買い受け、また2、3年後に島村が譲り受けたのがその起源です。以来120年、連綿と伝承されてきましたが、数年前からこども達が参加し、昨年はこども達を中心に公演されました。

※日付のはっきりしていない催しについては、後日広報でお知らせいたします。

利用案内

名鉄名古屋本線「妙興寺」駅下車徒歩7分
〒491-0922　一宮市大和町妙興寺 2390
TEL 0586-46-3215　FAX 0586-46-3216
【観覧料】（常設展・聴講料含む）
一般=200円（160円）　高・大生=100円（80円）
小中生=50円（40円）　＊（ ）は20人以上の団体料金
【休館日】毎週月曜日,休日の翌日,年末年始
【開館時間】午前9寺30分～午後5時（入館は4時30分まで）
※第2・4土曜日は小・中学生無料。
※満65歳以上で、一宮市発行の「老人医療受給者証」あるいは「シルバー優待証明カード」持参の方は無料。

一宮市博物館だより第25号
発行日……1999年10月9日
編集・発行……一宮市博物館
印刷……株式会社クイックス